近江湖東平野における条理空間について

農耕空間の史的形成過程に関する研究（その1）

AGRICULTURAL LAND ALLOTMENT USING THE JORI-GRID SYSTEM
IN KOTO PLAIN

The historical process of the formation of agricultural farming space in Japan No. 1

山森 芳郎*

Yoshiro YAMAMORI

Agricultural land allotment on the Jori-grid system developed in the 7th to the 8th century in koto plain of Shiga prefecture has Jori compartment which each side length is about 110 meters and which is divided into 10 paddy fields. In this report the land allotment is tried to restore to the original state by historical document and detailed survey map. Agricultural farming space on Jori-grid system was thought to be in homogeneous condition in spite of micro-geological differences. And then, the process of the development of the Jori-grid system is assumed as follows : firstly main (outer) levees for roads and creeks were developed in a short period of the first half of 8th C., and then the inner parts into paddy fields successively in the 8th C. and after.

Keywords : *land allotment, agricultural settlement, landscape*

集落, 景観, 地割

はじめに

この研究は農耕空間の歴史的な形成過程ならびにその構造特性を明らかにし、集落整備や史的環境の保全計画など農村計画に資することを目的とするものである。これまでその構成部位ごとに研究分野が分かれがちであったのに対して、ここでは居住空間を中心に周辺の圃場、さらには山林・海浜といった自然域までを含め、農耕者の立場にたって可能なかぎり統一的にその構造契機を探ろうとするもので、本報の条里地割-塊状村にひきつづき短冊地割-列状村、そして散居村（点状村）について報告する予定である。

とくに本報は滋賀県愛知郡に現存する条里制の集落を事例にその歴史的な形成過程をさかのぼり、圃場形態を中心に圃場と集落との関係を含めて集落類型上の特徴を明らかにしようとするものである。考察の順序は、まず集落に伝わる110年余り前の測量図によって近代化以前の圃場形態を復元し、また最近の精密な縮尺千分の1測量図と条里区画施行期の尺度によって当初の圃場形態の復元を試みる。さらに近年の考古学的な検出資料に配慮しながら、上代から中世まで数世紀にわたる農耕空間形成のシナリオを仮設する¹⁾。

これまでの条里制に関する研究成果は、そのほとんどを地理学や歴史学に負っており、歴史的な都城研究、構築物の研究に比べて工学、建築学からの寄与が少ない。ここでは既存の研究成果に依拠しながら、農耕空間の歴史的な形成過程に関する一連の研究の一環として、工学的、計画学的な立場から改めて条里制の集落景観に注目したい。

なお事例地選定の理由は、

- 1 代表的な条里地帯であり、現存していること
 - 2 奈良盆地（大和国条里）に比べて研究が少ない
 - 3 未発掘の資料があり、測量図も整っていること
- などである。

1. 条里制集落の類型的な位置づけ

地理学の渡辺久雄の貴重な研究成果²⁾によれば、条里制の施行範囲は近畿地方を中心に南は鹿児島県の川内平野、北は秋田平野と仙台平野を結ぶ線まで広がっている。ときの政治権力に近い近畿地方では平野部のほとんどに、また遠隔の地では地方政治の中心である国府の所在地周辺に分布する。つまり条里制は律令体制を支える政治経済的な基盤としての役目を担っていたのではないか

* 共立女子短期大学 教授・工博

Prof., Kyoritsu women's junior college, Dr. Eng.

— 130 —

と推定される。

条里制が施行された時期について歴史学者の意見は分かれるが、7世紀から8世紀前半にかけて、ことに最盛期は和銅―養老年間（708～730）というのが有力な見方である³⁾。大宝律令の制定が701年、平城京遷都710年、養老律令の制定718年、時あたかも律令時代のはじまりの時期でもある。百万町歩開墾計画722年、三世一身の法723年、墾田永年私財法743年…、いずれかが大規模な条里制施行の契機だったのではないかと考えられる。

百万町歩開墾計画までは、条里制施行と関係が深いと思われる公地公民制、班田制を維持発展させることが政策目標である。しかし、かならずしも末端まで足場をかためていなかった律令制下の地方支配のもとでは、耕地の拡大は思うようにいかなかった⁴⁾。後半の三世一身の法、墾田永年私財法と続く耕地拡大を刺激するための政策変更は、地方権力との妥協の産物であり、班田制そのものの崩壊を促すものにほかならなかったであろう。

したがって国レベル、郡レベルの広大な条里地割の工事が着手されるのは8世紀前半の一時期、しかしそれが有効に機能しはじめるのは、皮肉なことに律令制が崩壊していく8世紀中葉からのちのことであった可能性が大きい。

さて、これから見ていく愛知郡条里は琵琶湖の東側に広がる滋賀県湖東平野の中央部にある。まず郡境を確認すると（図―1）、愛知郡の北辺、旧愛知郡と旧犬上郡の境は今日の彦根市境より北にある。約30年前、昭和の町村合併によって旧郡内の一部が彦根市側に編入されたためである。南辺は愛知川を挟んで神崎郡と接しているが、ここでは旧愛知川が中流域から湖畔まで現在より北側を流れており、したがって条里制施行当時の旧郡境は今日の愛知郡領域に大きくくいこんでいた。

この愛知郡条里については、すでに昭和の初めにいちど復元が試みられている⁵⁾。その方法は平安期から足利期にかけての田券や神社寺院の記録をもとに、当時残っていた圃場形態にてらし坪ごとの小字名のなかから条里関連の呼称を抽出して、条里基準線の位置を限定した。

それによれば条は旧犬上郡境から南の神崎郡境まで1条から15条まで、里については東側の山岳部のすそ野を起点に西側の湖畔まで1里から最大22里まで設定されている。ただし南の11条から15条までは、平野部が愛知川に沿って東南側に広がっているのにあわせて1里ずつ起点をずらしている。結局、条里設定区域は最大で南北15条（約9900㍔）、東西26里（17000㍔あまり）の規模である。以上の条里設定区域のうち、実際に田面を区画する条里地割が施行された区域と、当初条里基準線を引いて条里区画番号はつけたものの坪区画・田面区画までには至らない条里地割の未施行区域がある⁶⁾。すなわち現在の秦荘町西部と愛知川町を結ぶ線より以西は

条里地割の施行区域、反対側の秦荘町東部、湖東町、愛東町にかかる東南山麓部一帯は条里地割の未施行区域である。したがって条里地割の施行区域に限ってみればその範囲は最大で南北13条（約8600㍔）、東西17里（約11300㍔）にとどまる。

条里制は計画論的にみて、きわめて均質な空間認識が前提になる。だから条里制が適用されたのは、ふつう地盤面が平坦な平野部である。ところが外見的に均質な平野部でも、微細にみていくと地形学的に不均質な空間の集合であることが多い。たとえ一度は均質な条里区画の設定を計画したとしても、地形条件や土壌条件によっては条里地割を施行することが不可能な場合も生じる。これがこれまでみてきた愛知郡で条里地割の施行区域と未施行区域が生じた原因だと考えられる。

さらに現代の土地改良事業の進行状況をみると、その不均質性は一層明確になる。もともとこの事業は愛知郡、神崎郡を含めた愛知川流域の県営事業である。愛知川上流の山間部に永源寺ダムを建設し、そこから一元的に農業用水を供給しようとしたもので、事業当初の考え方は対象地域を均質にとらえている点で、条里制施行当時によく似ている。土地改良事業の進行状況と条里地割の施行区分とあわせ、東側の山麓部から西の湖岸まで、概略つぎのような地帯区分を得る。

第1ゾーンはさきにみた秦荘町から湖東町、愛東町領域で、条里地割が未施行、土地改良事業を実施ずみの区域である。条里地割が未施行だったのは地形が入りくみ、勾配も大きく、土壌はいわゆる「白田地（やまつち）」、そのうえ水利が困難であるという悪条件が重なったからで⁷⁾、本格的な開田は近世以後のことともいわれる⁸⁾。もちろん土地改良事業のメリットは大きかった。

第2ゾーンは愛知川町の中央を縦断する旧中山道あるいはこれに平行する東海道新幹線以東の地域で、条里地割を施行ずみ、また土地改良事業も実施ずみの区域である。ここからは地形もごく平坦で、条里地割を施行したものの、用水の確保に非常に苦労したと伝えられる。したがってここでも土地改良事業のメリットは大きい。

第3ゾーンはJR東海道本線以東、おもに愛知川町西部地域で、条里地割を施行ずみ、土地改良事業は未着工の区域である。ここは南を愛知川に、北を宇曾川にはさまれ、愛知川の豊富な伏流水を生かした水利が可能で、愛知郡のなかでは条里制がもっともよく機能してきた地域といってよい。いまのところ、水源の水量にやや不安がある土地改良事業を見あわせている。

第4ゾーンは残りの湖畔までで、条里地割を施行ずみ、土地改良事業も実施ずみの区域である。地下水位が高く、水利には困らなかったものの、逆に「多すぎる水」に悩まされてきた。集落の立地は愛知川が形成した自然堤防上か、小規模ながら湖岸に発達した砂丘上に限定されて

図-2 愛知川町長野集落付近の条里地割現況図 (1988年) (2500分の1地形図, 千分の1測量図による。坪ごとの地名は小字名)

おり、飛砂防止のための湖畔のクロマツ林を見るとむしろ近世の集落の面影が感じられる。やはり土地改良事業のメリットは大きく、その着工が愛知川水系でもっとも早かったところである。

結局、今日歴史的な条里地割の姿をもっともよく残しているのは第3ゾーン、愛知川町西部の大門 (長野東)、

長野 (長野西)、長野出町、川原といった集落に付随する圃場に限定される。

2. 条里地割の形状

愛知郡条里そのものが歴史に登場するのは、当時の文献集『平安遺文』において延べ69箇所を数える⁹⁾。そ

図一3 愛知川町長野集落付近の条里地割明治期復元図（1877 年）（『長野村小字地図』による。小字名の下は条里坪番号）

のうちもっとも古いのは、延暦 15 年（西暦 796 年）発行の「近江国大國郷墾田売券」で、場所は十条五里三五坪というから現在の湖東町菩提寺集落付近と想定される（図一1）。つまり、遅くとも 8 世紀末には耕地の位置を示すのに条里呼称が用いられ、その後の文献でもそれが継承されている。ただしこれらの記録は時間的に 9 世紀

に集中して 8 世紀前・中葉の記録を欠き、またそのほとんどが愛知川中流域の右岸沿い、のちにふれる「愛知井水掛り」の地域にかたよる。したがって、必ずしもこれらの文献だけで条里制の施行時期をおしはかることはできないだろう。

条里制が施行された水田地帯において、条里基準線や

図-4 愛知川町大字長野小字十ヶ坪の田面形状 (1988年)

条里区画そのものを直接目にはすることはもちろんできない。条里区画を36等分し、約110m間隔の畦畔で格子状に仕切られた坪区画、それをさらに10等分した田面区画にいたってはじめて視覚的に確かめられる(図-2)。600数十m角の条里区画を一望するにはあまりに大きく、また地上に何の刻印も残していないからである。

いま考察の対象にしている愛知川町西部地区のうち長野集落には、明治期以来区長(自治会長)引継ぎの土地台帳がある。その第1は1877(明治10)年発行の『測量地図¹⁰⁾』、第2は同年作成とみられる『長野村小字地図¹¹⁾』、そして第3は1883(明治16)年長野村戸長役場発行の『境内道幅調記¹²⁾』であり、これらの資料に基づいて、近代農法以前の圃場形状を復元できる(図-3)。これと今日の圃場形態とを比較すると、近年の一部事業所進出や道路拡幅部分を除いて110年前の状況がよく継承されていることが確認される。

現在の状況にかえて、道路拡幅などによる形状変化が小さい小字十ヶ坪(5条13里第10坪)を例にみると(図-4)、坪区画は周囲を原則として外畦畔で縁どられる。ところによっては外畦畔を欠いた坪区画境界もある。水路や道路はこれまた原則としてこの外畦畔に配置される。区画によっては例外的に田面区画内を通過する水路もある。外畦畔に囲まれた田面は10等分され、その1枚1枚、登記方法からいえば1筆1筆は外畦畔に接する。そこから用水の供給を受けると同時に苗や肥料を搬入し、逆に収穫物を搬出する。かつて収穫時に稲を天日乾燥させ、脱穀作業をしたのもここである。またよく大豆を植え、養蚕が盛んだったころは畦畔木として桑が植えられたこともあったという。土地の所有区分でいえば水路や通路を含めた外畦畔は共有地、田面は私有地である。

図-5 愛知川町大字長野小字十ヶ坪の田面形状 (1877年)

1枚1枚の細長い田面区画どうしは幅40~50センチほどの中畦畔—土地のことばで「ぼた」—によって区切られる。中畦畔は外畦畔と違って私有分としていずれかの田面区画に属し、これまで所有者側の義務として管理され、毎年田植に先立って更新されてきた。共有地である外畦畔では川堀り(溝ざらい)や道普請はしても、畦畔そのものを更新することはない。その外畦畔が長い年月の間に變形し、やや蛇行しているのとは対照的に、更新が繰り返されてきた中畦畔は一直線に、常に新鮮さを保っている。1枚の圃場のなかで勾配が大ききときは、長辺の途中に「中ぼた」「下ぼた」などと呼ぶ法面のついた畦畔を設けて段差をつける。

この小字十ヶ坪で田面区画ごとの登記面積は、

1216	1140	1186	1163	1140	1137
1077	1176	1054	1107	(単位は平方m)	

したがって坪区画内の延べ面積は11396平方m、田面区画の平均面積1140平方mである。水路の有無、改良農道の有無により外畦畔の状況は様々で、すべての坪区画を一律に論じることは難しいが、田面区画の状況に大差はないとみてよいだろう(図-2)。分筆形状とは別に、機械力を導入するため中畦畔を取り除き、20m、30mに合体した大規模区画も出現している。他方所有権を細分化する分筆も生じており、その場合短辺側の外畦畔からの取水が欠かせないため、長辺方向にさらに細長く区画する。

さきに紹介した明治期の測量図によって、小字十ヶ坪における当時の状況を復元できる(図-5)。

3. 条里地割の復元

いくつかの前提を仮設しながら、計画時にさかのぼっ

図—7 復元条里区画の坪区画（細線）～里区画（太線）（坪区画内の数字は里区画内の坪番号）

で条里基準線を引き、条里（里）区画を設定する

- 2 条里（里）区画それぞれの辺を6等分し、1辺62歩（約110 m ）、合計36の坪区画を得る
- 3 坪区画の基準線4辺より内側へ外畦畔分として1歩ずつ追いこみ、1辺60歩（約106 m ）の田面区画外郭線を設定、さらにその1辺を中畦畔によって10等分し60歩 $\times$ 6歩＝1段（1100平方 m あまり）の田面区画単位を得る

の3段階である。現実には第1段階の条里（里）区画は想定されたものの、地形条件や土壌条件のために第2段階以下の坪区画、田面区画といった条里地割の施行にまていたらなかった場合もあったことだろう。

のちに田面区画の私有化がすすむと、耕作者は常に耕地の拡大を望む。田面区画境界つまり中畦畔では緊張が続き、当初の形状が比較的厳格に保持される。他方外畦畔ではときに緊張が弛緩し、田面区画からの侵蝕がはじまる。水路や法面配置の必要性がなければ、畦畔そのものが隣接する田面区画に再配分され、消失することもあると推定される。

4. 考古学的検証に基づく条里制施行のシナリオ

ここまで考察してきた旧郡単位の条里区画では、その畦畔は南北方向にたいして東へ約31～33度斜行している。ところがこのいわば「統一条里」にたいして、近年同じ愛知郡条里の領域に属しながら異なった方向を主軸にもつ地割の存在が注目されるようになった。

ところは愛知川中流域の右岸、愛東町から湖東町、愛知川町にかかる地域である。かつて、ここに愛知井（えちゆ）とよばれる湧水池から導かれ、ほぼ南北を強く指

向する一直線の用水路が存在していた（図—1）。そしてこの用水路の受益範囲の一部には、この地方に卓越する旧郡単位に統一された条里とは異なって東西南北方向に主軸をもつ方格地割に近いものが残っていた。

これに着目した歴史学の中野栄夫は「古条里」と名づけ、郡単位の「統一条里」より歴史的に先行するものではないかという仮説を提起した²³⁾。ついで地理学の小林健太郎らは同じところで詳細な実測作業をすすめて、いわゆる「統一条里」より区画がひとまわり小さい方格地割の復元をこころみた²⁴⁾。

中野らによって注目された南北地割は、その後の圃場整備事業によって用水路の一部をのぞいてすべてが失われた。そのかわり、ここ数十年琵琶湖の東側でくりひろげられてきた考古学的な発掘調査によって、「統一条里」の下から東西南北方向に規格性をもつ建築物や畦畔、溝などの遺構が多数検出された。とくに愛知川町の愛知井から北上する用水路の延長に位置した市遺跡、その北西へ沓掛遺跡、さらに西へ鯉遺跡と数次にわたる発掘調査の結果は、ほぼ次の2点に集約できる²⁵⁾。

第1に、統一条里の下層から東西南北方向に主軸をもつ畦畔、溝などが検出され、並行して出土した遺物から8世紀前半から中葉まで使用され、それ以後埋没している（以下「南北地割」、ただし必ずしも「古条里」の存在を実証する方格地割が確認されたわけではない）。

第2に、同じく南北方向に主軸をもつ建物群の遺構が検出され、それらはときに散居状に分布しながら9世紀から12世紀まで継続し、その後統一条里の方向に沿った中世以後の集居型の集落へと移行している。

以上の特質は愛知郡条里に隣接し、同じ傾斜角をもつ犬上郡や神崎郡条里にも共通して指摘される²⁶⁾。

したがって、歴史学が想定してきた条里制の施行時期とそれに対応した方向に主軸をもつ中世的な集落の形成期を区別しなければならず、最近の考古学的な発掘調査に際してあらたにつぎのような条里制施行シナリオが提起された²⁷⁾。

第1のシナリオは、はじめは古代の南北地割のうえに条里呼称のみが適用されたとし、条里制に従って実際に地割が施行されたのは中世の集落が成立する9ないし12世紀のことであるとする。

第2のシナリオは、8世紀前半に一部の条里地割の工事に着手し、地域ごとに完成させながら9ないし12世紀の中世集落成立期まで工事が続けられたとするものである。今日の圃場整備事業ですら完成までには時間がかかる、まして技術が未熟な古代においてはなおさら年月を要しただろうと推定する。

しかし第1のシナリオでは、古代の律令制が崩壊していく9ないし12世紀に旧郡単位の条里地割を一気に完成させる体制があったか、また第2シナリオについては、

はたして3ないし4世紀という長い期間にわたってひとつの統一された事業計画を遂行する体制が継承されていたかという疑問が残る。

そこで条里制の重層的な機能、つまり、

- 1) 圃場の位置を示す座標軸としての役割
- 2) 農道、水路、法面といった坪区画レベルの農業基盤としての役割
- 3) 田面が区画され、実際に耕作が行われる圃場としての役割

に着目して、第3のシナリオを提起できる。

すなわち、まず8世紀前半の一時期に統一一条里の施行区域内全体に坪区画レベルの主(外)畦畔が完成される。そのときまでは少なくとも律令制下の公地公民思想は生きていた。しかし実質的な田面まで整えるにはさらに時間が必要であり、そして何より地方権力のために公地公民制に代わる動機づけが欠かせなかった。したがって、条里制施行の当初は主畦畔とともに圃場も整えられた区画もあれば、主畦畔だけは完成したものの耕作地は未整備のままの区画もあったのではないかと考える。

このシナリオを想定したのは次のような工学的な根拠に基づく。ふつう農業基盤は一体になって機能するもので、部分的に完結するものではない。南北地割をもった既存耕地の再整備や新たな開発地を含めて、一度にできるだけ全体像に近づきたい。工事に必要な賦役の期間も短いほどよい。

ただし、この基盤整備事業は南北方向に基軸をもつ既存の建築群をさけて、進められたのではないか。そのため考古学的に検出されつつある古代集落は9ないし12世紀まで継続し、またさきに歴史学の中野栄夫が提起したように一部愛知井沿いの南北地割が統一一条里から除かれて残存したという説明も可能である。

整備済みの圃場と未整備の圃場の混在について、歴史地理学の金田章裕によれば、条里制では先進地域であったと思われる奈良盆地においてさえ「田畠共に有効に利用する極めて集約的で有利な土地利用形態」ができあがったのは、16世紀も後半のことだったという²⁸⁾。これも条里制の施行段階を坪区画整備、田面区画整備、集落整備の3段階にわけた今回の工学的な立場からのシナリオ提起のひとつの根拠になりうるだろう。

南北方向の「古条里」が実在したかという課題とともに、いずれのシナリオが事実であったか、その検証のために今後の考古学的な発掘調査の成果が期待される。しかしこの種の調査が近代的な開発行為に伴うものである以上、それが明らかになるときは条里制地割という歴史的な遺産が永遠に失われるときでもある。

まとめ

以上本報は、生活域から生産域までを含めた統一的な

農耕空間の構造契機を解明する研究の一環として条里制について考察したものであり、とくに工学的、地域計画学的立場から当初の地割形態の復元を試みるとともに、近年の考古学的な発掘成果を考慮して8世紀前葉から数世紀を要した条里空間形成のシナリオを提起した。

我が国最初期の計画的な農耕空間として、条里制集落では均質な環境認識を前提に厳格な規格性をもつ圃場域と住戸が塊状に集合する居住域とが画然と区分される。それには律令制ないし荘園制といった耕作者集団を支配する強固な社会組織が前提になっており、後世の耕作者と耕地の個々の対応を尊重する列状村あるいは点状村(散居村)とは対照的な類型の特徴を呈示している。そしてその施行当初から1200年を越えて継承されてきてなお、今日の農法にも十分対応できる農業基盤としての特質をもっている。

しかしそのほとんどが平野部に展開しているため、ときには農業的な土地改良事業によって、あるいは都市的な開発行為によって土地利用の改変が進み、条里地割を目撃できる機会は年ごとに狭まっている²⁹⁾。本報の終わりに生きている歴史的な遺産として条里景観の保存が急務になっていることを指摘しておきたい。

注

- 1) 詳しくは拙著『解説格子の仮設一条里制の集落—』共立女子短大政科紀要第32号、1989、同じく『条里制、その考古学的考察』同第33号、1990を参照されたい。
- 2) 渡辺久雄『条里制の研究—歴史地理学的考察』創元社、pp.319～328、1968
- 3) 吉田 孝「律令制と村落」(『岩波講座 日本歴史3 古代3』岩波書店所収) p.186、1976。また歴史学の岸 俊男は条里制に先行する代制地割の存在を示唆している。「日本都城制総論」(日本の古代第9巻都城の生態)中央公論社所収) pp.76～80、1987
- 4) 米田雄介『古代国家と地方豪族』教育社、p.51、2 1979「律令制下の地方支配は、地方豪族たちの権力を無視することはできず、むしろ彼らの権力に依存するところも少なくなかった…」、森田 悌『日本古代の耕地と農民』第一書房、pp.58、9、1986「水田維持のためには絶えず功力を投下し灌漑施設の整備や整地・除草その他の作業を行う必要があるが、収公の時が近づくとき自から開いた田にかかる功力の投下を怠り「開地復々荒ル」という事態になったのだと考える。…水田の増加を図るという観点からすると、永年私財田として百姓の墾田保持を認めない限り、一般百姓の開田意欲を刺激できなかったであろう。」
- 5) 滋賀県愛智郡教育会『近江愛智郡志巻一』pp.117～130、1929/1981復刊、同付図—近江國愛智郡条里図
- 6) 歴史学の石母田正は三重県の伊賀地方で発見された歴史資料の解説から、村落形態に「A条里坪付あり」「B条里坪付なし」の二つの類型があることを提示した。この類型区分と本論の愛知郡条里についての考察とを比べると、A類型は条里区画設定、地割施行区域に相当するものと推定される。だがB類型は条里区域設定、地割未施行区

- 域なのか、条里区画そのものが未設定だったのか不明である。石母田正『中世世界の成立』伊藤書店、p.4、1946
- 7) 『近江愛智郡志巻一』前出
 - 8) 湖東町在住の郷土史家西澤源治氏のご教示による。
 - 9) 『平安遺文』15・16・22・33・44・47・49・50・62・65・87・88・89・114・116・117・120・123・128・131・132・135・140・144・147・149・150・151・159・187・954・(2401)・3152・4443・4901号文書による。
 - 10) 甲乙丙3巻からなり、地番つまり1筆ごとに1ページを費やして所有者、地目、形状、主要寸法、面積を記入してある。とくに条里地割内の畦畔の所有・管理分まで記載されている。
 - 11) 1ページにつき縮尺600分の1で小字ごとの土地利用区分、分筆状況を図示し、さきの『測量地図』を小字ごとに編集しなおしたものと推定される。凡例区分は「田、河及溝渠、道路、宅地、畑、藪、林、堤塘」の8種類、色わけがなされている。
 - 12) 小字ごとに道路幅員、水路幅員がそれぞれの延長とともに記載されている。
 - 13) 現在のところ大方はいずれの型式が先行したか、それとも並行したか、速断を避けている。渡辺久雄(1968)前出 pp.275~7、岸 俊男(1987)前出 p.77。半折型先行説は『令集解』田令田長条の「凡田、長廿歩、廣十二歩爲段」(『新訂増補国史大系23令集解前編』吉川弘文館 pp.345~6)をよりどころにし、また田面を100 m 以上にわたって平坦にしなければならないという技術上の難点も考える。最近発掘された圃場あとも、短区画であるという(鬼頭清明『古代の村—古代日本を発掘する3』岩波書店、pp.126~7、1985)。ただそうであったとすると、いつ何のために、それもなぜ一斉に長地型に移行したか説明が必要である。もともと長地型は用排水の便があり田面区画を細分割するのにも都合よい。地形的に傾斜しているところに半折型が集中しているという指摘も見逃すわけにはいかない(岩本次郎「半折型地割の再検討」『奈良県史4条里制』名著出版、pp.680~4、1987所収)
 - 14) 最近では伊東太作「土地と建物の尺度」、木全敬蔵「城坊制と条里制」(ともに『季刊考古学』第22号、1988所収)
 - 15) 曲尺でも江戸時代に享保尺、又四郎尺、両者の折衷尺の3種があり、1875(明治8)年度量衡取締条令によって折衷尺が採用された。曲尺1尺は約30.303センチ m 。
 - 16) 岸 俊男(1987)前出。『令集解』田令田長条の「以高麗五尺、准今尺、大六尺相当(p.345)」、『令義解』雑令の「凡度地、五尺爲歩、三百歩爲里(『新訂増補国史大系22』吉川弘文館所収、p.333)」にもとづく。
 - 17) 岸 俊男(1987)前出、木全敬蔵(1988)前出
 - 18) 愛知川町管内図1万分の1、2500分の1、および愛知西部地区圃場整備事業平面図1000分の1
 - 19) 岸 俊男(1987)前出
 - 20) 渡辺久雄(1968)前出 pp.273~81
 - 21) 木全敬蔵(1988)前出
 - 22) 木全敬蔵「条里地割の計測と解析」(『奈良県史4条里制』名著出版1987所収)
 - 23) 中野栄夫「近江国愛智荘故地における開発と灌漑」(『地方史研究』138号1975所収)
 - 24) 高橋誠一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」(『滋賀大学紀要』27号、1977所収)
 - 25) 葛野泰樹『市遺跡発掘調査概要Ⅰ』愛知川町教育委員会、p.1、p.21、1983、西野辰博『市遺跡発掘調査概要Ⅱ』愛知川町教育委員会、p.1、1984、西野辰博『沓掛遺跡、市遺跡Ⅲ発掘調査概要』愛知川町教育委員会、p.1、p.31、2、1985、喜多貞裕『愛知川町埋蔵文化財概要報告書第4集』愛知川町教育委員会、p.21、1986、喜多貞裕『鯉遺跡発掘調査報告書』愛知川町教育委員会、p.10、p.11、1989
 - 26) 田中勝弘「残存条里と集落遺跡」(『滋賀県考古学論叢第2集』1985所収)、宮崎幹也「犬上川左岸扇状地における律令期集落の発生と展開」(『滋賀県埋蔵文化財センター紀要2』1986所収)、同「条里遺構の調査と現状」(『滋賀県文化財保護協会紀要第2号』1989所収)など
 - 27) 田中勝弘(1985)前出「残存地割りという現代的な資料と集落遺跡という過去の資料とを有機的に関連付けることによって、条里開発の過程や条里集落の様相等が追及できるのではないかと考えるのである。…集落遺跡を…事例的に追及することによって、統一条里が段階的に施行され、今日に至ったものであること…」を指摘している。
 - 28) 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂、pp.492~5、1985「条里地割内部においても、荒地や畠が多く、また現作率低いといった不安定な土地利用を余儀なくされていた…。…遅くとも16世紀末頃には、田畠共に有効に利用する極めて集約的で有利な土地利用形態となった」、森田悌(1986)前出 p.50、1「古代の水田の景観を具体的に画くことは困難であるが、現今の整然とした美田と異なりかなり雑然ないし荒れた景観を有し、熟田と非熟田水湿地の間に余り差が無かった…」と推定している。ただし、主畦畔と田面区画の関係について、今日主畦畔のみで田面区画を欠いた遺構は確かめられていない。
 - 29) 愛知郡に隣接する神崎郡五箇荘町では175 m の土地改良事業に際して、条里景観を残すため畦畔間隔110 m 、畦畔幅2 m とした(1986年度事業)。しかし用排水路は完全分離され、田面区画(圃場形態)もまったく異なっている。いま保存が望まれるのは、1200年間継承されてきた条里地割そのものである。

(1991年4月10日原稿受理、1991年9月9日採用決定)